

象徴と觀念

—藝術と哲學—

故岡 本 春 彦

哲學は一切の展相を何等の抽象なき智的直觀を以て一切包括的且つ獨存的に、即ち統一的に反省するものである。故にそれの展相に應じて夫々の觀念イデアが生ずる。かつて學的反省に於て生じた概念が認識的客觀物の單なる模寫的抽象でもなく、又實在より離れたものではなくして客觀物に隠れてゐた真相を直觀よりは一層根柢から見たものであつたと等しく、哲學によつて生ずる觀念は諸々の展相を最も根柢的なる相に於て見たものであつて、従つて觀念こそは諸々の展相が一層實在となつたものである。そして先驗哲學の方法に従へば後に表はれるものほどより根本的より本質的より實在的であるが、もし然りとすれば哲學は最後の段階に於て最も完全なる絶對者の客觀化としてあらはれたものであるから、そこに生ずる觀念こ

それは眞の絶對者の最も完全なる姿であり、最も根本的な本質的な絶對實在でなければならぬ。而して諸々の展相と云ふものは元來絶對者の活動の所産に外ならぬから、それが眞の相に於て見られたるものに外ならぬ觀念は、絶對者の諸々の活動そのものゝ完全なる表れに外ならない。そしてかの同じ絶對者の活動の所産ではあるが切り棄てらるべき反融一的氣隨活動の所産たる「四角な三角」と云ふやうな對象や幻覺や不合理や偽や惡や不信や醜——醜には二種あつて融一活動の單に不完全なる表れなるためものと全く反融一的活動によつてかき亂されたために生ずるものとあるが、こゝに云ふのは後者のものだけの事である、——などの眞の根柢たる觀念もやはり實在であるが、それは其本性上切り棄てらるべき、又は形式上だけの無内容な氣隨活動そのものに外ならぬから、肯定さるべき活動に相當する觀念とはその性質を異にする實在で、言はゞ否定さるべき實在とも言ふべきものであることは注意せねばならぬ。そして以下に述ぶる處は主として肯定的觀念及び肯定的活動の事であることをお断りしておく。尤も融一的活動に従ふ活動の形式を借りてはあるが、かの反融一的氣隨が著しく活動するものとして表はれる惡、不信などは問題としてゐるので後に説く象徴に於ても固よりかゝる活動の象徴をも忘れてはな

らないことを書き添へておきたらう。

ところで藝術は獨存的一切包括的(即統一的)反省的ではなくして、個別的、斷片的直觀的ではあるが、やはり又見るものと見られるものと等しき融一的活動(詳しく云へば向融一的氣隨)の表はれに外ならぬから、見る活動も融一的なら、見られるものも融一的で従つて凡ての展相が不統一的個別的ではあるがとにかく融一の相に於て把捉される。故にその點に於て藝術活動は哲學的活動の産んだ觀念に近いものを産まねばならぬ。もとより非反省的不統一的な藝術的活動は最も根本的實在である。觀念は生めないが、物質や概念などよりは一層根本的一層實在なものを生じなければならぬ。言はゞ個別的直觀的(即ち客觀的)な觀念とも言ふやうなものを生じなければならぬ。而して藝術活動の生ずるかくの如きものはシュルリングの語を借りれば是れ即ち神々(Götter)若しくは象徴(Symbole)と言ふべきものである。故に觀念と象徴とは一方は主觀的、反省的、一方は客觀的、直觀的、一方は系體的で全體との統一的關係があるが一方は個別的、不統一的であることには差はあるが共に融一の相に於て諸々の展相を見たものであることは等しい。その差は僅に一步しかない如く見える。然し藝術はどこまでも哲學よりは低次の展相のものである。故に象

徴は觀念よりはより實在性の少いもので、決してシュエリングの言ふやうに觀念と對等のものではない。象徴が主觀化され(即ち哲學的に反省され)もう一層實在的にせられれば觀念に轉化するが觀念から何かを減ずればとにかく(觀念は之を單に客觀化しても象徴には戻らない。觀念の客觀化は觀念とは別物ではなくして觀念の表出もしくは記録にすぎない。觀念の單なる客觀化を象徴だとする考は自覺發展史の展相の順序を誤つた一稱のアナクロニズムである。親は子を産み得ても子は親を産み得ないと同じである。故に哲學は藝術の主觀化ではあり得ても哲學の客觀化は藝術ではない。さればシュエリング自らも一方に於て神話は理性の所産ではなくして空想の所産に過ぎないものとしながら、彼は己が理想的象徴として過賞したギリシアの神話を以て哲學の單なる客觀化の如く取扱ひ、その當時の人の考へた眞の哲學(そして今彼の説く哲學に説く絶對者の發展の經路をそれが完全に客觀化しものとしてギリシア神話に於ける暗夜と運命、チクロイペンとタイタン、ツォイスとオリンプスの神々及びその神々の行動の發展を一々己の哲學に比論してゐるのは不當である。

然し彼が、神々は融一者の客觀化であるから神々は道德的でも不道德的でもない、

希臘神話の神々に不道德な神があるとしてもそれは不道德としての不道德ではなくして融一者の有限化を表はす爲に存する限界に外ならぬから本來は絶對的に神聖なもので又かの神々の病とか老とか云ふものなども人間のそれとは異つて決して缺陷として見らるべきものではない、かゝる見地からのみホームアの詩に表はれた神々の不道德は考察しなければならぬと言つたのは卓拔なる正しき見解のやうに思はれる。抑々藝術、象徴、神々はすべての展相を直觀的に融一の相(詳しく云へば向融一的氣隨の相即絶對の相に於て見るものである。而してすでに述べた様にすべての展相は皆本體的に見れば向融一的氣隨活動たる絶對者の表はれに外ならぬ。たゞ低次の階段に留まる間はそれが眞に絶對として見られず、従つて缺陷とか不道德とかとして見られたにすぎない。故にそれ自體に於てはすべて皆絶對である。悪も不信も絶對者の或る活動の表はれであれば病老も絶對者のある活動の表はれですべてそれ等をも絶對自身の本來の相に於て直觀する時生ずる象徴神々は固より絶對的のものである筈である。従つてそこにはもはや缺陷とか不道德とか云ふことのあらう筈がない。クライブ、ベルが其の「美術論」に於て言ふ様に鬼婆も藝術的見方を以てすればそれがそのまゝ美となり絶對となるのである。さればこそウイス

ラーが「十時」と言ふ講演に於て言つた様に、レムブランドはいつもアムステルダムの猶太街にも繪畫的な美しさと氣高い威嚴とを見出し、その住民が希臘人でない事を決して憂ひはしなかつたのである。象徴は感覺、物質、寫象、概念、肉慾、空想、道德的行爲及び不道德的行爲若しくは日常の氣隨的行爲、自然、歴史がより一層根本の相に於て見られたもので、それらよりは數倍根本的實在的絶對的のものであるから、それらの展相に於ける見方を以て之を判斷してはならない。故にかく絶對の相に於て見らるれば鬼婆も缺陷も不道德も凡てそのまゝ絶對完全でかく見られて生じた象徴の方が一層實在性の多いものである。(惡の象徴及び觀念は固より否定さるべき活動の象徴及び觀念ではあるが、その活動はやはり絶對者の所産であるから惡も本體的に即ち象徴的若しくは觀念的に見ればもはや道德上に云ふ不徳や惡ではなくして絶對的實在である。尤も否定さるべき絶對的實在ではあるが)―故に普通の客觀的な實在と言つてゐるものとは違ふと言ふ意味に於ては美(象徴と同じもの)は假象であると言ふ説は正しいけれどもそれで直に美を非實在的にして單なる主觀的のものとしてはならぬ。一層客觀的な一層實在的本體的のものだからである。ブレイクも言つてゐる。想像(今言ふところの象徴)の世界は永遠の世界である。それは吾人

が朽腐すべき形體を離脱したる後に收容せらるべき神の御胸である。想像の世界は無限にして永劫である。繁殖の世界生育の世界は有限にして瞬時のものである。この永遠の世界こそ吾人が唯自然の朽腐すべき鏡面に於てその反映されたる影を見るのみに過ぎぬ一切萬物の永劫の實在がある——と。アーサーシマンズも象徴は天國に於て神が世界に存在の名を興へた時に始まつたものである。それに於てのみ人々が實在にふれてゐると想像してゐる日常の出來事を掃き除けると吾人は人性、*Humanity*、そのものに一層接近するに至り、又世界以前に始まつたかもしれない、又世界以後につゞくかもしれない人性中にある物にもつと接するに至るものであると言つてゐる。

されば象徴、藝術美は先づ自然(外感)の客觀化として心理的主觀に對立する意味の自然以上のものである。ゲーテも藝術は藝術である、なぜなれば自然ではないからと言つてゐる。それは自然が一層實在となつたものである。藝術以下のすべての展相に於けるものはすべて、従つて所謂自然は本來融一者(詳しく云へば向融一的氣隨活動ではあるがかりに融一者と言つておく)の表はれであるけれども眞の融一者として表はれない。自然に於ては融一活動中の一方の活動は一方の中に姿を没し

眞に融一者としては表はれない。若しくは對立の分離のない以前の融一としてしか表はれない。従つて眞の融一としては表はれて居ない。對立の後の融一の有限化即ち眞の融一の有限化たる美、象徴は藝術活動によつて生ずるもので所謂自然其他のものには決して美はない。されば同じ自然の中でも堅い限界線が少くして有限でありながら無限をあらはすやうな海、空、山、川、月、夕陽などの如きものや、堅い限界線があると共にその中に動的無限的の性質の多い植物、動物、人體などは他のものよりは融一的の姿を有するから従つて他のものよりはやゝ美的な趣を有する事は事實ではあるが、眞の美は吾人が藝術的の眼を以て之を眞の融一自體に於て見る時々のみ生じて來るものである。故に藝術は自然以上のもので自然を模倣すべきものでは毛頭ない。然し藝術、象徴はあくまでも非反省的直觀的に表はれた融一であるからどうしても一般に有限者を、従つて自然を絶對に無視してはならない。故に藝術はどこまでも自然に即しつゝ、自然以上でなければならぬ。(一般に言へば藝術は凡ての有限者即ちずつと前にあげた自然認識的客觀、自然的自由行動、空想作用及び經驗智のいづれかに即しつゝ、しかも常にそれ以上に出でなければならぬ。

次に藝術が單なる心理的主觀の寫象即ち所謂心理印象と異なる所以も、もはや言

ふまでもなからうかからそれは省いておく。

然し心理的主觀とそれに對立する自然との對立があらはれてゐながら、しかも眞に融合して居る如き經驗、謂はば普通吾人が屢々經驗する一種の融一經驗(それは對立後の融一であるから單なる感覺とは異なる)とでも言ひ得べきものは元來(なほ眞に未だ融一が活動しないから低い程度に於けるものではあるが)やはり一種の藝術的の經驗である。又自分自身の有機體的生命の直觀もやゝ之に類する。然しそれが一度認識主觀に對立せしめらるゝや否やそのまゝで靜化せられるかも知しくは再見るものと見られるものとが對立せしめられ、しかも兩者とも單なる客觀、即ち靜的な *noëin* な分子の勝つた、*noëin* な分子を抜き去られたものとせられるからその時にはもはやそれだけでは藝術的とはなり得ない。

直觀的非反省的なる象徴、藝術が學的反省作用と異なることは言ふ迄もない。故に學的反省作用の産んだ概念は象徴とはならぬ。藝術が同じ言葉でも概念的な言葉をも憎み、直觀的な言葉を愛する所以はこゝにある。(といつて直觀の單なる模寫にすぎぬ言葉は固より嫌ひはするが——)次に概念は固より直觀ではないが判斷は直觀を概念、有限、無限、無意識意識の結合で一種の融一であるから藝術的とはなり

得ないかと言ふ人もあるかもしれないが、判断はやはり反省作用の産物として概念の勝つたものであり、且つ智的直觀的に直觀と思惟とが眞に結合してゐずして單なる結合に留まるから決して融一的藝術的ではない。故に藝術は自然科學や心理學をとり入れ利用することはかまはないが、それ自らは自然科學や心理學の忠僕となつてはならない。自然科學的智識の重みに負けがちであつたテニスンが眞に一流の詩人に數へ難い理由もこゝにある。故に科學上の眞若しくは一般に學的眞と美とは何等關する所はない。

もし果して藝術品が既に述べた如く如何なる意味に於ても融一的な體驗の表現であり、無限なる融一的絶對者の客觀化であるならば、その作品には作者自らにも解き難き無限の意味があるのは固よりのことである。そしてその無限の意味のある所以は既に言つた様にシュルツの言つたとは反對にそこには經驗智や有限以上の純粹意識、無限が解き放し難き融合に於て溶けこんでゐるからである。(そして有限の中にとけこまずに有限に對立する無限はそれ自ら一種の有限で而かく孤立的である間は無限も解き得るもの意識し得るものであるが、之れが眞に有限の中に溶け込めばもはや解き難き眞の無限となるからである。)されば藝術はどこまでも暗

示的であるべきであつて、この意味に於ても決して學的反省作用の生ずる概念や説明や敘述(絶對的の直觀の模寫はあり得ないから敘述は實は幼稚なる説明であるが)であつてはならぬ。それ等に於てはそこにある無限は一種の有限となつて居り且つ有限と無限との結合が融一的智的直觀的でなく、従つて解き難き無限の意味はそこには、あり得ないからである。又空想作用の一作用たる比喩、形容が無限の意味は有し得ないことも言ふまでもない。さればフランス象徴派の東道者ステファン・マラルメは名狀するは破壊することである、暗示するは創造することであると言ひ、ポエは叙事詩の時代は過ぎ去つた、詩は定形テライニットを忘むと主張してゐる。ヴェルレーヌも能辯を捕へてその頸ウナギを捻ぢよと叫んでゐる。といつて暗示を以て推量させること、同一視してはならぬ。推量はやはり反省作用若しくは形容、聯想と等しく空想作用に屬するものだからである。然らば暗示の本性は何ぞやと云ふことに對する説明を求むるものがあるかもしれないが、それはその質問自らが矛盾である。暗示でないものは説明し且つ數へ得るが暗示そのものはたゞ暗示のみを以て示し得るばかりである。それはたゞ漠然と不可見を可見とし、不可聞を可聞とする微妙な融一的體験の具體的表現法だとも云つて置いて、終極は人生の内奥に潛む感得力の理解に

訴へるより外ないものである。

眞の暗示は、然しながらたゞ概念的説明的又は模寫的表現法でないばかりであつて決して漠然としてゐたり朦朧としてゐたりするものではない。マールテルリンクも凡ての藝術は漠然を憎むが神秘的たることを憎まない。この二のものは相反して居るに係らず恰も秘密と曖昧、無限と不定とが混同せられる様に普通には混同せられてゐると言つてゐる。要するに暗示若しくは神秘と曖昧漠然とは趣きを異にしてゐるものなることを知らねばならぬ。曖昧漠然は模寫上若しくは智識上に於ける説明上の表現の缺陷であるが暗示(若しくは神秘)は分立後の眞の融一であり、又單なる客觀や知識上のもので更により直接な實在の完全な表現だからである。

されば又畫家の描く一線一點や音樂家の弾ずる一音一響は有限的なる單なる直觀若しくは單なる直觀の模寫ではない。外形は同じであつても單なる客觀的事物若しくはその模寫的叙述ではなくしてそれ自ら絶對融一者の完全なる暗示的表現である。それと同じ様に詩人の用ふる言語も外形は同じでも單なる直觀の模寫や概念や又その外面的なる二者の結合である説明や判断や叙述や形容ではなくしてそれ自ら融一的暗示的な絶對的の意味を有する言語である。されば象徴派の詩人

が概念的知識とは矛盾した「冷き火」とか「光り輝く闇」とかといふやうな言葉を用ゐてもそれを以て直ちにマックス・ノルドウの様に神経病患者の戯語と言ひのけてはならない。かのモウバッサンがその紀行文「漂泊」(La Vie Erante)に於て「ポードレル」の短曲中から「匂と色と響とは相呼び相應ふ」といふ非理智的な一句を引いて以て神秘にして深刻なる體驗の表現だとして激賞したのも決して誤りではない。所謂二重感覺、第六官など、云はるるものは單なる感覺ではなくして感覺的でありながら、しかも普通の感覺の與へない融一者の體驗を可能ならしめる一種の神秘的な感覺で、その體驗の發表はやがて暗示的融一的藝術的のものとなり、従つてそれを一概に理智的説明に矛盾するからと云つて排斥してはならぬやうに思はれる。

附言 この一篇は、前號に掲げた君の遺稿の小引中に一言された『シエルリングの象徴思想』の一節である。一つの纏まつた思想體を此様に首尾を切離して、單に其一片のみを發表することは、恐くは著者の意志では無かつたかも知れず、良しその意志が有り得たにはしても、いざ世に公にしやうとなれば、更に幾段の推敲を欲したかも知れない、と言ふ懸念は感じつゝも、吾等皆君の早世を悼むこと切なる結果、敢て意を決し、この一斑に因つて其全豹を窺ふと共に、若き姿の裏に封ぜられて去つた、『君の思想の行末』を想視する便りと爲したのである。(編輯者)